

修士論文
2011年1月

学習リソースからみるアルゼンチン日系子弟の会話能力
—OBCインタビューをもとに—

指導 佐々木 倫子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
209J3010
竹村 徳倫

目次

第1章 序論	1
1.1 研究背景	1
1.2 日系子弟への日本語教育とJHL教育の定義	1
1.3 アルゼンチンにおける外国語教育の現状	2
1.4 先行研究	2
1.5 研究目的	4
第2章 調査概要	5
2.1 調査協力児童とデータ収集期間	5
2.2 調査方法	5
2.3 OBCインタビューの概要	6
第3章 OBCインタビューの結果と考察	9
3.1 会話の量の結果と考察	9
3.2 会話の質の結果と考察	10
第4章 対人リソースの分析	25
4.1 自宅領域	25
4.2 親族領域	30
4.3 学校領域	36
4.4 交友娯楽領域	37
第5章 非対人リソースの分析	39
5.1 学習領域	39
5.2 娯楽領域	41
5.3 伝統・文化領域	53
第6章 考察	57
第7章 まとめと今後の課題	63
7.1 まとめ	63
7.2 今後の課題	64
7.3 継承日本語教育への提言	64

要旨

現在各地の日系社会では言語シフトに伴い、継承語としての日本語（以下、「JHL(Japanese as Heritage Language)」とする）教育のあり方も大きく変化してきている。しかし、JHL 教育は学習の必然のなさや学習者の動機の低さ、教師・教材・教授法の不足・未整備など多くの問題を抱えている（佐々木 2003a）。これらの要因はアルゼンチン国内の JHL 教育でも問題になっており、とりわけ学習リソースの未整備は大きな問題となっている。

他方、乏しいリソースの環境においても加算的バイリンガルとなる日系子弟も見られる。この理由としては日系子弟が学校外で個別に様々な学習リソースと関わっていることが考えられるが、そのような日系子弟と学習リソースとの関わり方を探ることは、JHL 教育に対する教育的介入を行う上で有意義であると稿者は考える。これまで「学習リソース」や「年少者日本語教育」に関する研究報告は少なからず行われてきたが、アルゼンチンの日系子弟を対象にした報告はほとんど見られない。

そこで、本研究ではアルゼンチンにある日系校を対象として、以下の3点を研究目的として設定する。

- (1)日系子弟の言語能力を会話力から測定し、日系子弟の会話能力の特徴を明らかにする。
- (2)言語習得の度合いを、日系子弟が関わりを持つ学習リソースと対照し、学習リソースと言語習得の度合いとの間にどのような相関関係があるのかを見る。
- (3)日系子弟が学校外で関わる学習リソースを調査し、それらが日系社会において JHL 教育に利用可能か検討する。

なお、日本語から現地語への言語シフトがほぼ完了した日系子弟における日本語教育は外国語としての日本語教育（「JFL(Japanese as Foreign Language)」）とみなされることも多いが、本研究では日本語教育の共同体の文化継承の手段を含む側面を重視し、日系子弟への日本語教育を JHL 教育と定義することにしている。

上記の目的により、本研究ではブエノスアイレス N 校に在籍する 12 歳児クラスと 9 歳児クラスの日系児童 9 人ずつ、合わせて 18 人の児童に調査を行った。調査は 1) 言語能力測定、2) 言語環境調査、3) リソースに関する半構造化インタビューの 3 つを行い、言語能力測定には中島（2000）の年少者向け会話力測定法 OBC（以下、OBC インタビュー）を用いた。会話能力に特に注目したのは、子どもの言語能力がとくに会話能力を基本に発達するからである。

上記のリサーチクエスチョンに関して、今回の調査からは以下のような成果が得られた。

- (1)日系子弟の言語能力を会話力から測定し、日系子弟の会話能力の特徴を明らかにする。

OBC インタビューを用い、これまでほとんどデータのなかったアルゼンチンにおける日系子弟の日本語能力を測ることができただけでなく、多くの児童の母語であるスペイン語の会話能力を測定したことにより、言語発達の過程における日本語会話能力の特徴を見ることができた。

OBC インタビューの評価の結果をふまえて調査協力児童の会話力を「高バランス+認知型」「高バランス型」「バランス型」「聴解力型」「低発達型」の 5 つに分類したことにより、

それぞれの特徴の一端を示すことができたと思われる。全体としては、アルゼンチンの日系子弟の日本語会話力については、多くの児童が前述の「バランス型」に分類され、簡単な受け答えができる程度であった。中には基礎言語面、対話面ではある程度高度な会話力をもつ児童もいるものの、全体的に認知面に関する評価が低かった。

また、OBCインタビューを用いて会話能力を測定したことにより、今後他の地域の調査研究データとの相互比較が可能になった。

(2)言語習得の度合いを、日系子弟が関わりを持つ学習リソースと対照し、学習リソースと言語習得の度合いとの間にどのような相関関係があるのかを見る。

調査対象児童に対する学習リソースに関するインタビューと保護者に対して行った言語環境調査により、多くの学習リソースに関するデータ、特に非対人リソースに関する情報を得ることができた。学習リソースの分析は浜田ほか（2006）Fishman（1986）、ネウストプニー（1995）を参考に「対人リソース」「非対人リソース」とに区分したうえで、対人リソースを「自宅領域」「親族領域」「学校領域」「交友・娯楽領域」の4つに、非対人リソースを「学習領域」「娯楽領域」「伝統・文化領域」の3つに分類した。

対人リソースに関しては、遠隔地という特性上、対人リソースの種類が少なく、おもに親族領域に集中しているという傾向があった。非対人リソースに関しては、娯楽領域のリソースが多くみられた半面、その関わり方には個々の児童間で大きな差がみられた。

また、得られた学習リソース情報と児童の会話能力を対照することにより、学習リソースが豊かな児童ほど言語習得が進んでいる傾向にあり、さらに単に非対人リソースと接触する児童よりも、対人リソースを交えた非対人リソースの接触が多い児童の言語習得が進んでいることが明らかになった。

他方、今回の調査はある時点の静的な言語習得を見たものに過ぎないため、学習リソースと多く関わったことによって言語習得が進んでいるのか、言語習得が進んでいるために学習リソースと多く関われるのかといった点については明らかにすることができなかった。

(3)日系子弟が学校外で関わる学習リソースを調査し、それらが日系社会においてJHL教育に利用可能か検討する。

学習リソースに関するデータは得られたものの、それぞれの学習リソースの質や、アルゼンチンにおける教師や学習時間など、JHL教育に関するデータが不十分なため、今回の調査では得られた学習リソースのデータを日系社会におけるJHL教育へ活かす段階にまでは至らなかった。

今回の調査からは消えゆく継承後教育の実態の一端が明らかになったと同時に、遠隔地にありながら様々な学習リソースと接触することによって日本語を習得している児童の存在も確認することができた。近年はインターネット通信を利用することで、日本在住の人々とのコミュニケーションが容易になり多くの非対人リソースの共有も可能になってきていることから、今後は日本国内のリソースの利用も視野に入れる必要があるように思われる。

参考文献

- 石井恵理子他(2003)「学習リソースの再検討：日本語学習の多様性を読み解くためのフレームワーク作りに向けて」『第2回日本言語政策学会研究発表会資料』
- 宇佐美まゆみ(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf> (2011/1/11 閲覧)
- 岡崎敏雄(2002)「学習言語能力をどう測るか—TOAMの開発・言語習得と保持の視点からの言語能力の生態学的見方—」『多言語環境にある子どもの言語能力の評価(日本語教育ブックレット1)』, 国立国語研究所, 48-59.
- 工藤節子(2006)「台湾の日本語学習者の学習リソース利用—インタビュー調査から」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書』国立国語研究所
- 佐々木倫子(2003a)「加算的バイリンガル教育にむけて - 継承日本語教育を中心に-」『桜美林シナジー』第1号 桜美林大学大学院国際学研究科, 23-38.
- 佐々木倫子(2003b)「3代で消えないJHLとは?-日系移民の日本語継承」「MHB教育研究会ホームページ」<http://www.mhb.jp/2003/08/jhljsljfl.html> (2010/7/10 閲覧)
- 社団法人在亜日本語教育連合会(2008)『アルゼンチン国日本語教育データ』社団法人在亜日本語教育連合会事務局
- 田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店
- トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第7号 17-29.
- 中島和子(2000)『子供の会話力の見方と評価：バイリンガル会話テスト(OBC)の開発』カナダ日本語教育振興会
- ネウストプニー, J. V. (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子(2006)「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐる」『日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性—』国立国語研究所, 66-100.
- 林さと子(2006)「日本語学習の多様性と個別性—第二言語習得研究の視点から—」『第二言語学習の個別性要因に関する基礎的研究—社会文化的要因を中心として—』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究成果報告書, 4-19.
- ベーカー, コリン(岡秀夫訳)(1996)『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- Fishman, J. A. (1986). Domains and the relationship between micro- and macro-sociolinguistics. In Gumperz, John J. and Hymes, Dell (Eds.) *Directions in sociolinguistics : the ethnography of communication*, Oxford : B. Blackwell.
- Gobierno de CA BuenosAires(2001) *Diseño curricular de Lenguas Extranjeras*. BuenosAires : Secretaría Educación.
- Vanpatten, B. (2007) Input processing in adult second language acquisition. In VanPatten, Bill and Williams, Jessica (Eds.) *Theories second language acquisition : an introduction*, New York : Routledge.